台大日本語文研究第 21 期
2011 年 6 月，頁 35-68
2011-4-29 收稿，2011-6-21 通過刊登

日語形容詞與形容名詞的複合詞
—形態、意義與功能—

湯廷池[*]
劉懿禛[**]

摘要

本文首先介紹日語複合詞的基本概念與相關前人文獻，再分析並記述日語複合形容詞與複合形容名詞的形態、意義與功能。主要的結論包括：(一) 日語複合詞的內部結構本來包括主謂式、偏正式、並列式與賓述式 (主要限於複合名詞)。但是，日語的複合形容詞與複合形容名詞似以主謂式與偏正式居多，而屬於並列式的例詞卻很少 (例如，複合形容詞)，甚至幾乎不存在 (例如，複合形容名詞)。(二) 如文中所附的樹狀結構圖所顯示，日語的複合詞，無論是形容詞或是形容名詞，都屬於主要語在右側的同心結構，無異反映了日語在語言類型上屬於「主要語在末端的」語言特徵、以及「句法規律與詞法規律之間常呈現對稱性」的語言事實。

另外，本文針對著 影山 (2009) 把屬於少數看似例外的異心結構的複合形容名詞 (例如，「太っ腹 (な)、悪趣味 (な)」) 分析爲「依存語在兩端的屬性滲透合成複合形容名詞」的處理方式，另外提出把這些複合形容名詞分析爲「主要語在右端的同心結構的複合形容詞」，

[*] 輔仁大學外國語文學院講座教授
[**] 開南大學應用日語學系助理教授

再經過轉類來變成「異心結構的複合形容名詞」的處理方式，並比較這兩種處理方式的利弊。

關鍵詞：日語複合形容詞與複合形容名詞、複合形容名詞的同心結構與異心結構裡詞義與形態的搭配、主要語與依存語、主要語的屬性滲透、詞類轉換

The Formation, Meaning and Function of Japanese Compound Adjectives and Adjective Nouns

Tang, Ting-chi*
Liu, Yi-chen**

Abstract

The present paper deals with the external function as well as the internal structure of compound adjectives and adjective nouns in Japanese. The conclusions of the paper include :(1) though the internal structures of Japanese compounds mainly consist of the 'subject-predicate type', 'the modifier-head type' (mostly limited to compound nouns), the 'coordinative type' and the 'complement-predicate type', the great majority of compound adjectives and adjective nouns belong in the 'subjective-predicate' and 'modifier-head' types, with only a few exceptional cases of compound adjectives, but not compound adjective nouns, belonging in the 'coordinative type'. (2) Japanese compounds, whether adjectives or adjective nouns, are 'right-headed' and thus are all 'endocentric' in nature.

It must also be pointed out that while Kageyama (2009) analyzes compound adjective nouns such as "太っ腹（な）、悪趣味（な）" as "double-dependented" in structure with the categorial features of both dependents, our paper adopts the analysis that these compound adjective nouns are better converted from the corresponding compound adjectives, since there exist subject-predicate compounds ,that can be used as both compound adjectives and adjective nouns.

* Guest Professsor of the College of Foreign Languages, Fu-Jen Catholic University
** Assistant Professor of the Department of Applied Japanese Language, Kainan University

Keywords: Japanese compound adjectives and compound adjective nouns, a mismatch between semantic interpretation and internal structure of endocentric and exocentric structures in compound adjective nouns, heads and dependents, feature percolation, conversion

日本語形容詞と形容名詞の複合語
—形態・意味と機能—

湯廷池*
劉懿禛**

要旨

本稿は、日本語複合語に関する基礎概念と先行文献を踏まえた上で、複合形容詞と複合形容名詞の形態・意味と機能について分析・記述する。複合語の内部構造は、主述型・修飾型・並列型・補足型(最後のタイプは主に複合名詞に限られる)などに大別することができるが、結論としては、日本語の形容詞も形容名詞も、主述型や修飾型に属する語例が多い一方、並列型に属する語例はごく少数である（複合形容詞の場合）か、あるいは皆無に近い状態（複合形容詞名詞の場合）であることを指摘し、日本語複合語のほとんど全部が主要部末端／右端の言語類型に属することを反映して、右側主要部の内心構造に分析できることを樹形図を添えて説明する。

また、一部の複合形容名詞の語例（例えば、「太っ腹（な)、悪趣味（な)」など）に見られる例外的な外心構造の現象については、右側主要部の内心構造からの品詞転換（転成）の結果であるという分析を提示し、影山（2009）がこれらの語例を両側依存部の素性合成からなる外心構造であるという分析と対照・比較しながら、この二つの異なるアプローチに関する長所と短所についても論述する。

* 輔仁大学外国語文学院講座教授
** 開南大学応用日本語学科助理教授

キーワード：日本語複合形容詞と複合形容名詞、複合形容名詞の内心構造と外心構造における意味と形態のミスマッチ、主要部と依存部、主要部の素性滲透、品詞転換（転成）

日本語形容詞と形容名詞の複合語
—形態・意味と機能—

湯廷池
劉懿禛

一、はじめに

日本語の形容詞（adjective）と形容名詞（adjective noun）[1]は、一般の自然言語（natural language）における語（word）と同じように、単純語（simple word）と合成語（complex word）の 2 種類に分けることができる。単純語とは、語幹（stem）を 1 つだけ含む語[2]のことを指し、合成語とは、語幹を 2 つ（あるいは 2 つ以上）含むか、それとも語幹のほかに接辞（affix；さらに、語幹に後続する接尾辞（suffix）と語幹に先行する 接頭辞（prefix）[3]に分けることができる）を含むものを指す。

合成語の中で、語幹を 2 つ（あるいは 2 つ以上）含むものを複合語（compound word）と呼び、語幹のほかに接辞を含むものを派生語（derived word）と呼ぶ。また、複合語と派生語は、語構成（word structure and formation）と語の意味解釈（semantic interpretation）の視点から、その語全体の範疇帰属（categorization）[4]を決定したり、その語全体の上位概念（hypernym）を表したりする。また、構

---

1 「形容名詞」は、伝統的な国語文法では「形容動詞」と呼ばれていたもので、統語的に 形容詞的（〔＋A（djectival)〕）と名詞的（〔＋N（ominal)〕）の両方の統語的特徴を兼ね具えているところから、だんだんとこのように呼ばれてきたものであろう。また、英語では‘nominal adjective’や‘adjective nominal’と訳される。形容動詞を形容名詞と改称する詳細な理由については、湯（2000）を参照されたい。

2 単純語の中には、通時的（diachronically）に「酒菜（さけな）＞肴（さかな）＞魚（さかな）」・「誰（た）そかれ＞黄昏（たそがれ）」・「呉の藍（くれのあい）＞紅（くれない）」・「衣手（そで）＞袖（そで）」のように、複合語から転化したものがあるが、共時的（synchronically）には単純語と見なされている。

3 自然言語（natural language）の中には、「語幹」と「語幹」との間に起こる 接中辞（infix）を持つものもある。

4 「範疇」とは、一般の文法書で品詞（part of speech）と呼ばれるものに相当する。

成要素（constituent）は語の範疇素性を決定するある主要部（head）[5]と、主要部以外の構成要素である依存部（dependent）の 2 つの部分に分けることができる。

日本語の複合語と派生語は、原則的に主要部を内包し、その主要部と語全体が同じ語彙範疇（lexical category）に属して、語全体と主要部の表す意味内容が上位概念と下位概念（hyponym）の包摂関係（partonymy）[6]にある内心構造（endocentric structure）を持つが、影山（2009）の分析によると、日本語の複合語と派生語には、主要部と依存部からなり、主要部の範疇素性（categorial feature）が語全体に滲透する（percolate）内心構造のほかに、主要部を持たず、ただ依存部と依存部からなり、語全体の語彙範疇が 2 つの依存部の範疇素性の合成（composition）によって形成される外心構造（exocentric structure）が存在するという。また、内心複合語は、主要部が語の右側に起こる右側主要部（構造）（right-headed（construction））、主要部が語の左側に起こる左側主要部（構造）（left-headed（construction））と主要部が語の右側と左側の両方に起こる両側主要部（構造）（double-headed（construction））[7]の 3 つの類型に分けることができる。また、いわゆる外心複合語については、影山（2009：28）は範疇と意味の観点から名付けによる外心複合語（exocentric compound word by naming）[8]と意味の変化だけを被った外心複合語（exocentric compound word through semantic change）は、主要部と依存部の両方を持つことから、本当の意味での外心複合語とは言えず、主要部を持たず、依存部だけからなる外心構造だけが外心複合語に属すると主張し、クオリア構造（qualia structure）・転成（conversion）や両側依存部構造の合成形容名

[5] 主要部は中心部（center）とも呼ばれる。
[6] 厳格に言えば、包摂関係は全体と部分の隣接関係を表し、メロニミー（meronymy）と呼ばれるのに対し、上位概念と下位概念の関係は特に分類関係（taxonomy）と呼ばれることがある。また、学者の中には包摂関係と分類関係を広義の換喩（metonymy）の中に入れる人もいる。
[7] 両側主要部は、影山（2009：26）では複主要部と呼ばれている。
[8] これら見掛け（apparent）だけの外心複合語の詳細な内容については後述する。

詞[9]の視点からこれら外心（構造）複合語の意味と機能に対して新しい分析と説明を提示している。

さらに、複合語はその範疇素性の視点から、複合名詞（compound noun；例えば、「歯ブラシ」（N＋N）・「丸顔」（A＋N）・「ゆで卵」（V＋N）・「交渉相手」（VN＋N）・「有効期限」（AN＋N））、複合動詞（compound verb；例えば、「血走る」（N＋V）・「走り出る」（V-（i）＋V））、複合形容詞（compound adjective；例えば、「口汚い」（N＋A）・「蒸し暑い」（V-（i）＋A）・「細長い」（A＋A））、複合形容名詞（compound adjective noun；例えば、「太っ腹」（A＋N）・「大仕掛け」（A＋V-（i））[10]）、複合動名詞（compound verbal noun；例えば、「意思決定」（N＋VN）・「不法投棄」（AN＋VN））などに分けることができ、その内部統語構造（internal syntactic structure）の視点からは、主述型／述定型（subject-predicate type；「心強い」（N‖A）[11]・「心細い」（N‖A）・「欲深い」（N‖A）・「望み薄い」（V-（i）‖A）[12]・「聞き苦しい」（V-（i）‖A））、修飾型／装定型（modifier-modificand type；「薄暗い」（A / A）[13]・「蒸し暑い」（V-（i）/ A）・「黒焦げ」（A / V-（i））・「赤剥け」（A/V-（i））・「遠ざける」（A/V）・「近寄る」（A/V））、補足型（complement-predicator type；「魚釣り」（N|V-（i））[14]・「インク消し」（N|V-（i））・「嫁入り（N|V-（i））・「名付ける」（N|V）・

[9] 両側依存部構造の合成形容名詞とは、＜A／N＞の内部構造を持つ「太っ腹（な）・小柄（な）・弱気（な）」や＜A／V-（i）＞の内部構造を持つ「大仕掛け（な）」などのように、依存部の形容詞語幹（[＋A]）と名詞語幹（[＋N]；動詞連用形語幹（V-（i））からの「名詞化」用法をも含む）の範疇素性が語全体に滲透して、形容名詞（[＋A, ＋N]）を合成することを指す。

[10] ＜V-（i）＞の記号は、動詞の連用形や第1中止形を指し、ここでは名詞化形として複合語の後項語幹に被修飾語（modificand）として使われている。

[11] ＜N‖A＞の記号は、名詞語幹（N）と形容詞語幹（A）との間に、主述関係や述定関係が成り立っていることを示す。

[12] ＜V-（i）＞の記号は、動詞の連用形を指し、ここでは名詞化形として複合語の前項語幹で主語として使われている。

[13] ＜A / A＞の記号は、形容詞語幹（A）と形容詞語幹（A）との間に、修飾語と被修飾語の修飾関係や装定関係が成り立っていることを示す。

[14] ＜N|V-（i）＞の記号は、名詞語幹（N）と動詞連用形語幹（V-（i））との間に補足語（目的語を含む）と述語の関係が成り立っていることを示す。このような内部構造の中で、対格目的語を表す「魚を釣る」に対応する「サカナ¬ツリ」が中高型で発音されるのに対し、与格補足語を表す「嫁に入る」に対応する「ヨメイリ」は平板型で発音される。

指差す」(N|V))、並列／等立型（coordinate type ;「押し開ける」(V-(i) ∩V) [15]・「転げ落ちる」(V-(i) ∩V)・「細長い」(A∩A)・「起き抜け」(V-(i) ∩V-(i))）などに分けることができる。

以上の基礎概念と先行文献の内容を踏まえた上で、本稿では日本語の複合形容詞と複合形容名詞の形態・意味と機能について分析・記述していく。本稿の構成は大体次のようである。まず、第 1 節で日本語の複合語に関する基本概念と先行文献の成果を簡単に紹介し、本稿の目的と構成を説明する。次に、第 2 節で複合形容詞、特に内心複合形容詞を取り上げ、依存部と主要部の位置関係・内部構造・意味解釈やアクセント型などについて論述し、複合形容詞と派生形容詞の区別についても触れる。さらに、第 3 節では複合形容名詞を取り上げ、特に外心複合形容名詞について、影山（2009）の先行文献を参照しつつ、その内部構造の特殊性、複合形容名詞の範疇素性の決定過程などについて論述する。続いて、第 4 節では、否定辞語幹（negative stem）の「ない」を含む複合形容詞と否定接頭辞（negative prefix）の「不-・無-・-非」を含む派生形容名詞を取り上げ、それぞれ影山（2009）と Kishimoto（2009）を参照しながら、その生成過程や複合語全体の範疇素性の決定について分析・記述していく。最後に、第 5 節では本稿の内容を要約し、将来の研究課題を提示する。

二、日本語の内心複合形容詞

日本語の複合形容詞は、原則的に依存部が複合形容詞の左側に現れ、主要部が複合形容詞の右側に現れる右側主要部の内心構造を持ち、主要部の範疇素性が複合形容詞全体に滲透して語全体の範疇素性となる。以上のような統語的特徴を持つ典型的な（prototypical）日本語の複合形容詞を内部統語構造（構成語幹の統語範疇と構成語幹相互の間における統語構造を含む）によって下位分類し、これら

[15] ＜V-(i) ∩V＞の記号は、動詞の連用形語幹（V-(i)）と動詞（終止形）語幹の（V）が並列や等立の関係にあることを示す。

内部構造とそのアクセント型の関係にも触れながら、語例を挙げて説明していく。

まず、日本語の複合形容詞は、その 統語構造（syntactic structure）の内容によって（i）主述／述定型・(ii) 修飾／装定型・(iii) 並列／等立型の 3 種類に分けることができる[16]。以下、この 3 つの統語類型に基いて、その内部構造（internal structure）と外部機能（external function）について、語例を引きながら説明していく。

(一) 主述／述定型（‘N ||‘A）[17]：前項名詞語幹（‘N）と後項形容詞語幹（‘A）が主語（subject）と述語（predicate）の主述／述定関係（predication ; ‘|| ’はこの主述関係を表す記号）で結合され、一般に「N が A い」と言い換えることができる。また、主述型複合形容詞の名詞語幹は、身体の部分や器官を表す「心・気・身・手・口」などが現れることが多く、形容詞語幹は、直観的な評価形容詞や主観的な感情形容詞に属することが多い。さらに、主述型形容詞は、形容詞語幹のアクセント型によって複合語全体のアクセント型が決まる。すなわち、形容詞語幹が平板型の場合には、原則として平板型や「－2」の中高型[18]で発音され、形容詞語幹が起伏型の場合には、原則として「－2」の中高型で発音される。

（1）a. 「心苦しい」（＝「心<u>が</u>苦しい」）：ココ¬ロ＋クルシ¬イ→ココログルシ¬イ。

b. 「心強い」（＝「心<u>が</u>強い」）：ココ¬ロ＋ツヨ¬イ→ココロヅヨ¬イ。

c. 「心細い」（＝「心<u>が</u>細い」（比喩的に））：ココ¬ロ＋ホソ¬イ→ココロボソ¬イ。

d. 「心弱い」（＝「心<u>が</u>弱い」）：ココ¬ロ＋ヨワ¬イ→ココロ

[16] 日本語の複合名詞が「魚釣り」（＜「魚を釣る」）・「インク消し」（＜「インクを消す」）・「姿見」（＜「姿を見る」）・「後押し」（＜「後を押す」）・「子育て」（＜「子を育てる」）のような目的語名詞（N）と連用形他動詞（Vt-(i)）からなる補足型（N｜V-（i））の内部構造を持つのに対し、複合形容詞や形容名詞にはこのような補足型の内部構造は見られない。

[17] 「‘N 」と「‘A 」は、それぞれ名詞語幹と形容詞語幹を表す。

[18] 「－2」の中高型とは、アクセント核（accent nucleus）が語尾から数えて 2 番目のモーラ（mora）に起こる起伏型のアクセントを指す。

ヨワ¬イ。

（2）a.「気重（い）」[19]（＝「気が重い」）：キ＋オモ¬イ→キオモ¬イ。

b.「気軽（い）」[20]（＝「気が軽い」）：キ＋カル¬イ→キガル¬イ。

c.「気忙し（い）」（＝「気が忙しい」）：キ＋セワシ¬イ→キゼワシ¬イ。

（3）a.「身軽（い）」[21]（＝「身が軽い」）：ミ＋カル¬イ→ミガルイ／ミガル¬イ。

b.「身近（い）」[21]（＝「身{が／に}近い」）：ミ＋チカ¬イ→ミジカ¬イ。

（4）a.「手軽（い）」[21]手{が／に}軽い」）：テ＋カル¬イ→テガルイ／テガル¬イ。

b.「手早（い）」[21]（＝「手が早い」）：テ¬＋ハヤ¬イ→テバヤ¬イ。

（5）a.「口煩い」（＝「口が煩い」）：クチ＋ウルサ¬イ→クチウルサ¬イ。

b.「口汚い」（＝「口（＝言葉遣い）が汚い」）：クチ＋キタナ¬イ→クチギタナ¬イ。

c.「口喧しい」（＝「口かずが多くて喧しい」）：クチ＋ヤカマシ¬イ→クチヤカマシ¬イ。

主述型複合形容詞の名詞語幹は、身体の部分や器官を表す名詞のほかに、一般の名詞も現れる。

（6）a.「息苦しい」（＝「息が苦しい」）：イキ¬＋クルシ¬イ→イキグルシ¬イ。

b.「草深い」（＝「草が深い」）：クサ¬＋フカ¬イ→クサブ

[19] しかし、形容名詞の「気重」は「キオモ」と平板型で発音される。
[20] しかし、形容名詞の「気軽」は「キガル」と平板型で発音される。
[21] 形容名詞の「身軽」・「身近」・「手軽」・「手早」は、「ミガル」・「ミジカ」・「テガル」・「テバヤ」と平板型で発音される。また、「足早」（「アシバヤ」）という形容名詞はあるが、「足早い」という形容詞はない。

カ¯イ。

c. 「奥深い」（＝「奥が深い」）：オ¯ク＋フカ¯イ→オクブカ¯イ。

d. 「縁遠い」（＝「縁が遠い」）：エ¯ン＋トーイ→エンドーイ／エンドオ¯イ。

e. 「物見高い」（＝「物見が高い」）[22]：モノミ¯＋タカ¯イ→モノミダカ¯イ。

f. 「規則正しい」（＝「規則が正しい」）：キ¯ソク＋タダシ¯イ→キソクタダシ¯イ。

g. 「薄気味悪い」（＝「（薄）気味が悪い」）[23]：ウスイ＋キミ¯＋ワルイ→ウスキミワル¯イ。

また、名詞語幹（‘N）と形容詞語幹（‘A（い））からなる主述型複合形容詞（‘N ||‘A い）のほかに、連用形動詞語幹（‘V-（i））[24]と形容詞語幹（‘A（い））からなる主述型複合形容詞（‘V-（i） ||‘A い）もある。

（7）a. 「聞き苦しい」（＝「聞くのが苦しい」）：（キク→）キキ＋クルシ¯イ→キキグルシ¯イ。

b. 「漕ぎ辛い」（＝「漕ぐのが辛い」）：（コ¯グ→）コ¯ギ＋ツライ→コギズライ／コギズラ¯イ。

c. 「見苦しい」（＝「見るのが苦しい」）：（ミ¯ル→）ミ¯クルシイ→ミ¯＋グルシ¯イ。

d.「疑い深い」[25]（＝「疑念が深い」）：（ウタガウ→）ウタガ

[22] 「物見」（ものみ）には、「外部や遠方を見るための設備（例えば、「物見窓・物見台・物見櫓」）という意味がある。

[23] 「薄気味悪い」は「気味悪い」（キミワル¯イ）という主述型複合形容詞にさらに程度を表す「薄」が加わって修飾型形容詞を形成したものと分析することができよう。

[24] 「V-（i）」の記号は、母音動詞（vocalic verb；すなわち、動詞語幹（verb stem）の語尾が母音の〔i, e〕で終るもの）は、動詞の原形（root form）のままで、また、子音動詞（consonantal verb；すなわち、動詞語幹の語尾が子音が終わるもの）は動詞の原形に〔i〕音が付くことを示す。

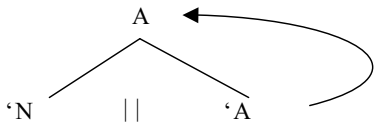
[25] 「疑い深い」のほかに、「疑り深い」（＝「疑りが深い」）：ウタグリブカ¯イ）という表現もある。

イ＋フカ¯イ→ウタガイブカ¯イ。

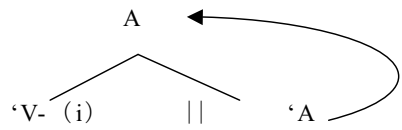
e. 「待ち遠しい」[26]（＝「待つのが長く感じられる」）：（マ¯ツ→）マチ＋トオ（シ）イ[27] →マチドーシ¯イ。

これら 2 つのタイプに属する複合形容詞の語構成の内容を樹形図（tree giagram）で図示すると、次のようになる。

（8）a. 心苦しい〔Ex〕[28]



b. 聞き辛い〔Th〕



このタイプの形容詞語幹には、「苦しい」や「辛い」のほかに、「にくい」（例えば、「読みにくい、食べにくい」）や「難い」（例えば、「許し難い・度し難い」）などのように難易の意味を表すものが使われることが多い。また、（8）の樹形図が示すように、これらの複合形容詞では、右側（すなわち、後項語幹）が主要部（head；中心部（center））として機能し、その範疇素性が上部に滲透（percolate）して、複合形容詞全体の範疇を決定する右側主要部（right-headed）の内心構造（endocentric structure）に属することがわかる。

（二）修飾／装定型（‘A1 ／‘A2）：前項形容詞語幹（‘A1）が副詞と

---

[26] 「待ち遠しい」とほぼ同じ意味の「待遠（い）」（マチド¯オイ／マチドオ¯イ）は、『明解日本語アクセント辞典第 2 版』に見られるが、『広辞苑第 4 版』には「待遠」の項だけがあり、「待遠い」の項はない。

[27] 「遠い（トオい）」（口語）と「遠し（トオし）」（文語）という言葉はあるが、「遠しい（トオしい）」という言い方はない。

[28] ‘〔Ex〕’と‘〔Th〕’の記号は、それぞれ当該の形容詞が経験者（Ex（periencer））と対象（Th（eme））を項（argument）に取って主語とする一項述語（one-place predicate）の項構造（argument structure）やセータ枠（theta-grid）を表す。

して機能し、後項形容詞語幹（‘A2）との間に修飾語（modifier）と被修飾語（modificand）の修飾／装定関係（modification）を形成する。このタイプの 複合形容詞は、一般に「A1 ク A2 しい」と言い換えができ、前項語幹の形容詞は、次元形容詞から転化して程度表現となるものが多く、後項語幹の形容詞は視覚属性形容詞に属して色彩を表すものが多い。次の例を見られたい。

（9）a. 「浅黒い」[29]（＝「うす黒い」）：アサイ＋クロ¯イ→アサグロ¯イ。

b. 「薄青い」[30]（＝「うっすらと／かすかに青い」）：ウスイ＋アオ¯イ→ウスアオ¯イ。

c. 「薄暗い」（＝「うっすらと／かすかに暗い」）：ウスイ＋クライ→ウスグライ／ウスグラ¯イ。

d. 「薄[31]明るい」（＝「うっすらと／かすかに明るい」）：ウスイ＋アカルイ→ウスアカルイ／ウスアカル¯イ。

e. 「薄ら寒い」（＝「うっすらと／少しばかり寒い」）：ウッス¯ラ＋サム¯イ→ウスラサム¯イ（／ウスラサムイ）。

f. 「仄暗い」[32]（＝「ほのかに／かすかに／うす暗い」）：ホ¯ノカ＋クライ¯→ホノグライ／ホノグラ¯イ。

g. 「仄白い」[33]（＝「ほのかに／かすかに白い」）：ホ¯ノカ＋シロ¯イ→ホノジロ¯イ（／ホノシロイ）。

h. 「どす黒い」[34]（＝「にごったように黒ずんでいる」）：ドス

---

[29] 関連語に「浅黄（あさぎ）」（＝「薄い黄色」）・「浅葱（あさぎ）」（＝「浅い藍色」）などがある。

[30] 『広辞苑第 4 版』には「薄青」の項はあるが「薄青い」の項はなく、『明解日本語アクセント辞典第 2 版』には「薄青」・「薄青い」ともに項として挙げられている。また、この語に関連する「薄赤」・「薄赤い」は『広辞苑第 4 版』の中には収められていない。

[31] （9b,c,d）で使われている「薄」は「うっすらと・かすかに」の語彙的意味がかなり色濃く残っており、「薄汚い・薄気味悪い」の「薄」のように「なんとなく」という語彙的な意味の希薄化が見られないので、ひとまず接頭辞ではなく、語幹と見なすことにした。

[32] 「仄か」が自由語であるのに対し、「仄」は拘束語であるので、接頭辞と分析すべきだと思われるが、参照のために敢えてここに列挙した。

[33] 『明解日本語アクセント辞典第 2 版』にはこの項があるが、『広辞苑第 4 版』にこの項は見られない。

[34] 関連語に「どす声」（にごった声・低く太・ずごみを利かせた声」がある。

＋クロ¬イ→ドスグロイ（／ドスグロイ）。

i. 「程遠い」[35]（＝「相当に遠い」）：ホド＋トオイ→ホドトーイ／ホドトー¬イ。

j. 「程近い」（＝「相当に近い／あまり遠くない」）：ホド＋チカ¬イ→ホドチカ¬イ。

k. 「蒸し暑い」（＝「蒸されるように暑い」）：ムシ¬＋アツ¬イ→ムシアツ¬イ。

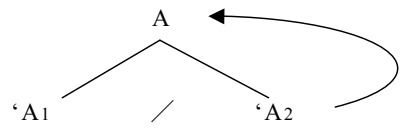
また、このタイプの複合形容詞には、前項語幹と後項語幹ともに色彩形容詞に属するものが見られる。

（10）a. 「青白い」（＝「青みがかって白い」）：アオ¬イ（／ア¬オ）＋シロ¬イ→アオジロ¬イ（／アオジロイ）。

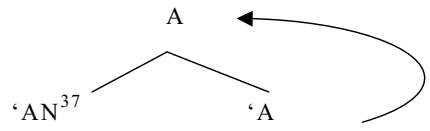
b. 「赤黒い」[36]（＝「赤みがかって黒い」）：アカイ（／ア¬カ）＋クロ¬イ→アカグロ¬イ（／アカグロイ）。

これら修飾型複合形容詞の語構成の内容を樹形図で図示すると、次のようになる。

（11）a. 浅黒い〔Th〕



b. ほの暗い〔Th〕



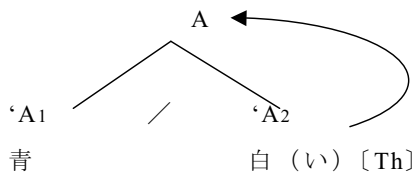
この「どす」は拘束語であるのが、「濁って不透明なさま」を表す接頭辞と解すべきであろう。

[35] 「程」は元来「時間的・空間的な度合」を示す程度表現である。

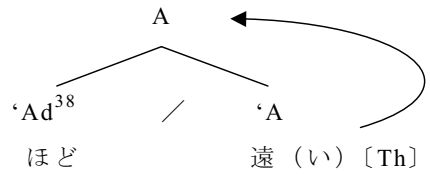
[36] 「赤黒い」の項は『広辞苑第 4 版』には見られないが、『明解日本語アクセント辞典第 2 版』には見出し語として載せられている。

[37] 「AN」の記号は形容名詞を表す。

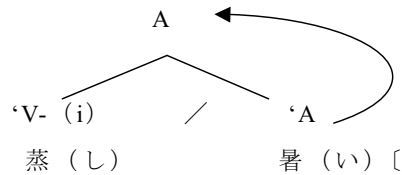
c. 青白い〔Th〕



d. ほど遠い〔Th〕



e. 蒸し暑い〔Th〕



（11）の樹形図が示すように、これら修飾型複合形容詞も主述型複合形容詞と同じように、右側／後項語幹が主要部／中心部として機能し、その範疇素性が上部に滲透して複合形容詞全体の範疇を決定する右側主要部の 内心構造に属することがわかる。

（三）並列型（A1∩A2）：形容詞語幹（‘A1）と形容詞語幹（‘A2）が等立的に並列された形式で現れ、一般に「A1 くて A2 い」と言い換えることができる。また、並列型の複合形容詞の形容詞語幹は、客観的な属性形容詞に属するものが多く、直観的な評価形容詞・主観的な感情形容詞・中間的な関係形容詞[39]に属するものは少ないようである。さらに、2 つの形容詞語幹からなる並列型複合形容詞は、それぞれの形容詞語幹のアクセント型に関係なく、平板型と中高型で発音される傾向がある。

[38] 「Ad」の記号は副詞を表し、「う（っ）すら・どす・ほど」などがこの範疇に属する。

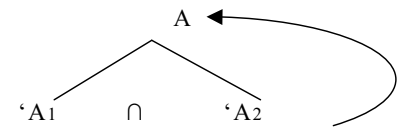
[39] これら形容詞の分類基準と分類機能については、湯（2006,2008）と劉（2007）を参照されたい。

（12）a.「細長い」（＝「細くて長い」）：ホソ¯（イ）＋ナガ¯イ→ホソナガイ／ホソナガ¯イ

b.「甘酸っぱい」（＝「甘くて酸っぱい」）：アマ（イ）＋スッパ¯イ→アマズッパイ／アマズッパ¯イ

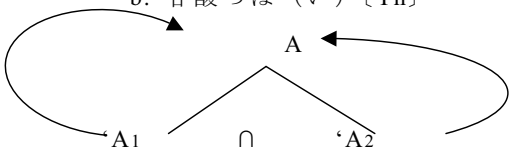
日本語の並列型複合形容詞はその語例の数が非常に少なく、複合形容詞の中では並列型の数がいちばん多い中国語と対照的である。また、このタイプに属する複合形容詞の語構造を樹形図で図示すると次のようになる。

（13）a. 細長（い）〔Th〕



細〔Th〕　　長（い）〔Th〕

b. 甘酸っぱ（い）〔Th〕



甘〔Th〕　　酸っぱ（い）〔Th〕

（13）の樹形図が示すように、並列型複合形容詞では両側語幹（すなわち、前項語幹と後項語幹）がともに主要部／中心部として機能しているので、両側主要部（double-headed）の内心構造であると解釈することができる。

（四）修飾／装定型（‘X ＼‘A1）：この名称は前述（二）の修飾／装定型と似通っているが、（二）の複合的修飾／装定型では前項語幹が形容詞に限られているのに対して、（四）の派生的修飾／装定型では前項語幹が形容詞以外の文法範疇かのように機能して、後項形容詞語幹を修飾し、前項語幹（‘X） と後項語幹（‘A1）との間に、修飾語（modifier）と被修飾語（modificand）の修飾／装定関係（modification）、ないし名詞的語幹と形容詞接尾辞の派生構造を形成する。このタイプの複合形容詞は、典型的に「くさい」を後項要素

に取り、一般に（i)「X の匂いがする」(ii)「いかにも／なんとなく～的な感じがする」という解釈が可能で、後項要素の「くさい」は、元来嗅覚形容詞がもつ「いやなにおいがする」の「語彙的な意味」から、接尾辞的な「～匂いがする・～ように感じられる・～らしい・いやになる程度～だ」の意味に転化しているのがその特徴である。

「臭い」は元来嗅覚を表す属性形容詞で、「よくない匂いのする様子」を表す。例えば、「汗臭い・男臭い・女臭い・金臭い・黴臭い・きな臭い・香水臭い・焦げ臭い・酒臭い・饐え臭い・熟柿臭い・血腥い・土臭い・泥臭い・生臭い・糠味噌臭い・日向臭い・抹香臭い」などの語例では、「～匂い」のする様子」という元来の意味を保留しているが、その中の一部は既に元来の語彙的意味が希薄化し、比喩的な意味（figurative meaning）に拡張している。例えば、「黴臭い」には「ものが古くなって役に立たない様子」[40]の意味が、「土臭い」と「泥臭い」には「洗練されていない様子」の意味が、「乳臭い」には「考え方や人間などが幼稚である様子」の意味が、「生臭い」には「極めて世俗的な雰囲気をもっている様子」の意味が、「血腥い」には「血の匂いが漂ってくるような、むごたらしい」の意味が、そして「糠味噌臭い」・「抹香臭い」と「日向臭い」にはそれぞれ「(古)女房の所帯ずれして新鮮味がない」・「縁起でもない、景気の悪い」と「食品の乾燥して不快な臭気」などの比喩的な意味が加わり、マイナスイメージ寄りの語として使われるようになってきている。さらに、「阿呆臭い・田舎臭い・陰気臭い・胡散臭い・けち臭い・爺臭い・七面倒臭い・洒落臭い・辛気臭い・照れ臭い・馬鹿臭い・バタ臭い・婆臭い・貧乏臭い・古臭い・分別臭い・水臭い・面倒臭い」となると、それぞれ「真剣に取り組むだけの価値が感じられない様子」・「〔田舎者じみた〕外見や服装」・「見るからに陰気で不快な様子」・「なんとなく不審で気が許せない様子」・「いかにも吝嗇である様子」・「男性がいかにも年寄りじみていて、不快な様子」・「非常に手間がかかって不快な様子」・「言動が分を越えて殊勝である様

[40] これ以下の比喩的意味の解釈は飛田・浅田（1991）から引用。

子」・「こまごまとしたことが思うようにならず、焦燥を感じる様子」・「内心をくすぐられる感じで、気恥ずかしい様子」・「非常に軽蔑すべき様子」・「欧米風の様子」・「女性がいかにも年寄りじみていて、不快な様子」・「いかにも貧乏に感じられる様子」・「長い時間が経過して新鮮さがなくなっている様子」・「物の道理（分別）をわきまえているように振舞う様子」・「親しい間柄にあるものが遠慮してうちとけない様子」・「非常に手間がかかって不快な様子」などのように、「～の匂いがする様子」の意味はなく、「いかにも～のように感じられる」の意味に転化して解され、語幹というよりはむしろ機能的には接尾辞かのように振舞っている。しかし、語幹であるか、それとも接尾辞であるかを問わず、こられの複合語と派生語はすべて右側主要部の内心構造であることに注意されたい。また、どちらの使い方でも「～臭い」はマイナスイメージ寄りの意味合いが感じられることにも注意されたい。

三、日本語の複合語形容名詞

次に日本語の複合形容名詞について述べる。形容詞と形容名詞は統語的に（syntactically）ともに程度副詞の修飾を受けることができ、比較構文にも現れることができる点で、形容詞的（〔＋A〕）であるが、形態的に（morphologically）おいて両者は異なる特徴を示す。すなわち、形容詞は終止形と連体形に「A い」（未然形）と「A かった」（已然形）の形式を取り、連用形では「A く」の形式を取るのに対し、形容名詞は終止形では断定を表す 補助動詞（auxiliary verb）[41]の「だ・である・でござる」（平常体未然形）・「です・であります・でございます」（丁寧体未然形）・「だった・であった・でござった」（平常体已然形）・「でした・でありました・でございました」（丁寧体已然形）を取り、連体用法では「ナ形」（AN

[41] ここでは伝統的な国語学に従って「補助動詞」と呼んだが、名詞や形容名詞を補（足）語（complement）として捉え、これら補助動詞を述語動詞（predicate verb）と見なすこともできる。

な)、そして 連用用法では「ニ形」(AN に) を取る、という違いが見られる。

結論を先取りして言うと、複合形容名詞も複合形容詞と同じく主述／述定型と修飾／装定型の 2 種類に分けることができ、並列型はほとんど皆無といってよい。また、複合形容名詞は複合形容詞に比べて内部構造が単純であり、語例の数も少ない。しかし、複合形容名詞のもっとも著しい特徴は、複合形容詞がすべて右側主要部の内心構造に属するのに対し、複合形容名詞はこのような右側主要部の内心構造に加えて、主要部を持たず従って依存部のみを持つ、両側依存部の外心構造が存在する[42]、ということである。

また、形容名詞は、形態上連体用法として「ナ形」を、連用用法として「ニ形」を、そして述定用法として「ダ形／デス形」を取る品詞であると原則的に定義づけることができるが、個別の語例の中には、ある特定の用法に片寄りを見せ、ことに述定用法には現れにくいものがあることは否めない。このため、本稿では連体形の「ナ」や連用形の「ニ」を取るものは、ひとまず形容名詞であると認定することにする。

以下、(一) 右側主要部構造、(二) 両側依存部構造の順に複合形容名詞の内部構造について述べていく。

(一) 右側主要部構造の複合形容名詞

(i) 主述型 A (‘N ||‘AN) : 前項名詞語幹 (‘N) と後項形容名詞語幹 (‘AN) との間に主語と述語の文法関係が成立する複合形容名詞。「‘N」と「‘AN」は、複合形容名詞の語幹がそれぞれ名詞と形容名詞であることを示し、「||」の記号はこの 2 つの語幹が主語と述語の主述関係にあることを表す。このタイプに属する語例としては、『広辞苑第 4 版』の中に「心静か・心長閑(のどか)・心短(みじか)・気短(みじか)・聞下手(ききべた)・気紛(きまぐれ)・肌理細(きめこま)か・口上手(くちじょうず)・口下手(くちべた)・物好(ものず)き[43]・物欲しげ・物欲しそ

[42] このような考え方と分析は、影山 (2009) に基づくものである。また、本稿の「両側依存部 (構造)」は影山 (2009) では「複依存部構造」と呼ばれている。

[43] 「物静か」は「何となく静かな様子」を表すので、修飾型と見なすことにする。

う・世話好き[44]」などが収録されているが、本稿の作者のインフォーマント（informant）調査によると、「色鮮やか・心大らか・心穏やか・心かたくな・心爽やか・心安らか・買物上手」などを受け入れる母語話者の数は少なからずある。このタイプの複合形容詞は後項語幹である形容名詞の範疇素性がそのまま上部に向って複合形容詞全体の範疇素性になるので、典型的な右側主要部の内心構造に属するといえる。

(ii) 主述型 B（‘N ||‘A ）: 前項名詞語幹（‘N ）と後項形容詞語幹（‘A）との間に主語と述語の関係が成立する複合形容名詞。主述型 A と主述型 B との間における違いは、前者の主要部形容名詞語幹の範疇素性がそのまま複合語全体に滲透するのに対し、後者は主要部語幹が形容名詞ではなく、形容詞なので、その範疇素性が滲透して複合語全体が 形容詞になり、さらに形容名詞に品詞転換／転成（convert）しなくてはならない。この意味で、主述型 B は厳格に言えば右側主要部の内心構造であるとは言えず、後述する両側依存部の外心構造に属し、名詞語幹の名詞的素性 （〔＋N〕）と形容詞語幹の形容詞的素性（〔＋A〕）が合併して、形容名詞的素性（〔＋N, ＋A〕）をもつ形容名詞が合成されたものと分析すべきかも知れない。この問題については、後述する両側依存部構造の討議の中でもう一度取り上げることにし、ここではひとまず主述型 B に属する語例を挙げることにする。

(14)「気短[45]・気重・気弱・肌理細か[46]・手短・手軽・身軽[47]・手近・

---

[44] 「物好き・物欲しげ・物欲しそう・世話好き」などの語例の前項名詞語幹と後項形容名詞語幹の間には、確か意味解釈の上では「ガ」格助詞を挿入することができるが、この「ガ」格は対象主語とも呼ばれるので、主格ではなく目的語に相当するものと分析されるべきかも知れないが、便宜上主述型の中に含めておいた。

[45] 「気短」は「気短な」とも「気短い」とも言えるので、主述型 A と主述型 B の両方に入れた。

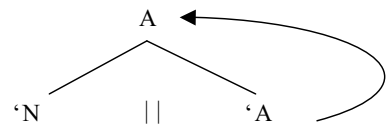
[46] 「肌理細」は「木目細」とも表記され、「キメゴマカ」とも発音される。このことばもイ形容詞とナ形容詞の両方に使われているので、A 型と B 型の両方に入れた。

[47] 「手短{な／に}」のように形容名詞の用法しかないのに対し、「手軽」と「身軽」は「{手／身}軽い」と「{手／身}軽{な／に}」の両方の言い方がある。

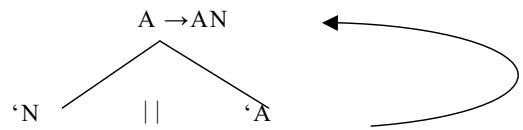
身近(みじか)[48]・身重(みおも)[49]・足早(あしばや)・骨太(ほねぶと)」。

「主述型形容名詞 A」と「主述型形容名詞 B」の語例に共通する特徴としては、主語名詞語幹 にヒトの身体部分や心理機能を表す「身・手・足・骨・気」などが使われることが多く、アクセント型は平板型が多い[50]ことが挙げられる。「手軽い・手軽な・気弱」の 3 つの主述型形容名詞を例に、樹形図で図示すると、次のようになる。

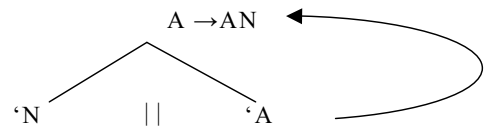
（15）a. 手軽（い）〔Th〕



b. 手軽い → 手軽だ〔Th〕



c. 気弱い → 気弱だ〔Ex〕



(iii) 修飾型（‘Ad ／‘A ）: 前項装定語幹（主に修飾語幹や程度などを表す副詞的表現（‘Ad)）と後項形容詞語幹（‘A ）との間に修飾語と被修飾語のとの間に修飾語と被修飾語の文法関係が成立する複合形容名詞である。装定語幹の中には、接頭辞的なものもあるが、

[48] 「手近」と「身近」にも、「{手／身}近い」と「{手／身}近{な／に}」の両方の言い方があり、同時に A 型と B 型に属する。

[49] 「身重」は「身重の体」のように名詞として使われることが多いが、「身重になる」のように形容名詞的に使う人もいるようである。

[50] 「気不味い」（キマズイ）のように、後項形容詞語幹（マズ¬イ）の影響を受けてか、「キマズ¬イと中高型で発音することができるものがある。

ひとまず語幹ないし準語幹であると解釈してこのタイプに含めることにする。

（16）a. 真っ赤・真っ黒・真っ白[51]・真っ青・真っ暗

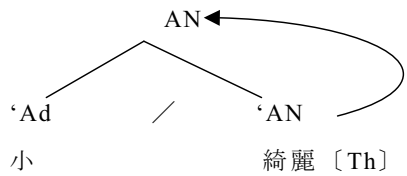
b. 小綺麗・小癪・小生意気[52]

c. 薄鈍・薄馬鹿・薄緑・薄紫[53]

d. 目深[54]

このほかに、「心の毒になることの意」に語源を発して「他人の苦痛・難儀についてともに心配すること」の意に転じた「気の毒」[55]があるが、これも広義の修飾型の中に入れることができるであろう。修飾型の形容名詞を「小綺麗」を例に、樹形図で図示すると、次のようになる。

（17）a. 小綺麗だ〔Th〕



このような分析から、修飾型の複合形容名詞も右側主要部の内心構造に属することがわかる。本稿の作者の知る限り、並列構造の複合形容名詞に属する語例は見当たらない。ただ、影山（2009）が指摘するように、日本語の形容名詞には、外心構造に属すると思われ

---

[51] 形容名詞の「真っ黒な」と「真っ白な」は、形容詞の「真っ黒い」・「真っ白い」としても使われる。また、これらのアクセント型に見られるように、「黒・白」が形容名詞の語幹として使われた場合には、頭高型で発音され、「黒い・白い」が形容詞の語幹として発音された場合には、中高型で発音される。また、「真っ赤」では「赤」の「ア」音が省略されて、尾高型になり、「真っ青」では「青」の「ア」音の前に子音の〔s〕が挿入されて中高型になっている。

[52] 「小綺麗」・「小癪」・「小生意気」はそれぞれ「コギ¬レイ／コ¬ギレイ」（中高型／頭高型）・「コシャク」（平板型）・「コナマイキ」（平板型）でも発音される。これらの語は古くは一律に頭高型で発音されていたものが、その後の変化によって中高型や平板型に転じたものと思われる。

[53] これらの語例は、形容名詞というよりも名詞として使われることが多い。

[54] 「目深」は「マブカ」とも発音される。このほかに、関西語から入ってきてののしりや卑しめの意味を表す「どけち」などがあるが、これも語幹というよりも接頭辞に属すると言えよう。

[55] 「気の毒」の意味解釈は、『広辞苑第 4 版』による。

る両側依存部構造の合成形容名詞が見受けられる[56]。

（二）両側依存部構造合成形容名詞

（18）a. 和語複合語：「太っ腹（な）・大仕掛（な）・弱気（な）・小柄（な）・弱腰（な）・甘口（な）」。

b. 漢語派生語[57]：不機嫌（な）・無責任（な）・無愛想（な）・非常識（な）・非力（な）・未完成（な）」。

c. 漢語複合語・派生語：「悪趣味（な）・多機能（な）・高水準（な）・高性能（な）・他品性（な）・他密度（な）・良質（な）・悪質（な）・異質（な）・均質（な）・高価（な）・安価（な）・低価格（な）・強力（な）・広範囲（な）・好景気（な）・低姿勢（な）・上機嫌（な）・大規模（な）・小規模（な）・長命（な）・短命（な）・短気（な）・上品（な）・下品（な）・広量（な）・有害（な）・狭量（な）・強欲（な）・薄幸（な）・冷血（な）

（18a）の語例は、前項形容詞語幹（‘A）と後項名詞語幹（‘N）との間に修飾語と被修飾語（主要部）の文法関係が成立し、複合語全体が名詞ではなく、形容名詞として機能しているので、右側主要部の内心構造に属するとは言えない。本稿における分析では、これに似た主述型 B の形容名詞（〔‘N ||‘A 〕AN；例えば、「身軽（な）・気弱（な）・身近（な）・手軽（な）」）などからの品詞転換（転成）として分析したが、影山（2009：36-38）はこのようなタイプの修飾型複合形容名詞（〔‘N／‘A 〕AN）を内心構造の複合名詞（N）から外心構造の複合形容名詞（AN）への転成ではなく、前項語幹（‘A）と後項語幹（‘N）がともに依存部として機能し、両側の語幹の範疇素性が同時に上部に向って滲透して合成した結果、複合語全体（‘A ＋‘N＝ AN）が合成形容名詞として機能すると分析する。また、影山（2009）はこのタイプに属する合成形容名詞の内部

[56] （18a）の語例は、影山（2009：34）から。

[57] ここで（18b）の漢語派生語と（18c）の漢語複合語を区別したのは、前者の前項語幹が接頭辞的であるのに対し、後者の前項語幹はそのような性質をもたないことによる。

構造は表面上修飾型かのように見えるが、内実は（19）のように属性を表す主述関係で言い換えるのが適切であることを指摘し、（20）のように 語彙概念構造（lexical conceptual structure ; LCS）の「〔N〕BE　AT-〔A〕」というラムブダ・オパレータ[58]（lambda operator）の「λ」を使ってこれら語例の意味を表示することを提示する。

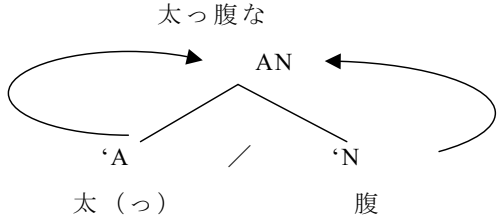
（19）a. 私の上司は太っ腹だ。＝私の上司は〔腹が太い〕。
b. このプリンターは多機能だ。＝このプリンターは〔機能が多い〕。
c. あの人は悪趣味だ。＝あの人は〔趣味が悪い〕。
d. あの人は無愛想だ。＝あの人は〔愛想がない〕。
e. あの人は不機嫌だ。＝あの人は〔機嫌が悪い〕。[59]

（20）a. 太っ腹：λx（〔x's HEART〕BE AT-〔BIG〕）
b. 多機能：λx（〔x's FUNCTION〕BE AT-〔MULTIPLE〕）
c. 悪趣味：λx（〔x's TASTE〕BE AT-〔BAD〕）
d. 無責任：λx（〔x's SENSE OF RESPONSIBILITY〕BE NOT-AT-〔x〕）[60]
e. 不機嫌：λx（〔x's MOOD〕BE NOT-AT-〔GOOD〕）

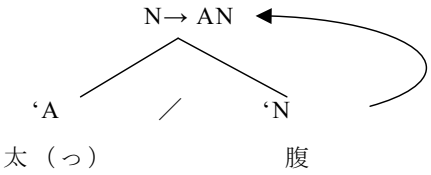
影山（2009）の分析を前述の各タイプの複合形容詞や複合形容名詞に倣って樹形図で表示すると、（21a）のようになる。一方、これらの複合形容名詞を複合名詞からの転生と見なして、樹形図で表示すると、（21b）のようになる。

[58] 「ラムブダ・オパレータ」「λ」は 事象（event（uality）; 変化や状態を含む）を属性（property）に切り換える機能を持つ。
[59] （19e）の例は本稿によって付け加えられたものである。
[60] 影山（2009：36-37）の原文では、例文（19d）では「無愛想」が使われているにも拘らず、その語彙概念構造を表す（20d）では「無責任」が使われているが、ひとまずそれに従った。

（21）a. 合成複合形容名詞

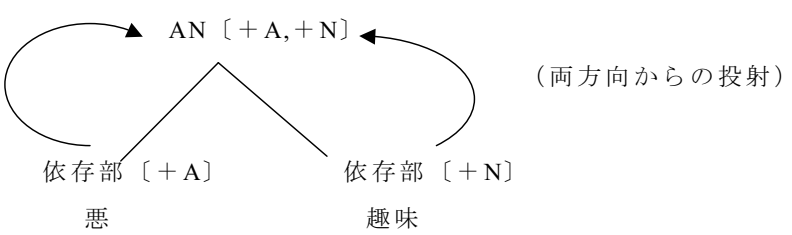


b. 転成複合形容名詞



実際に、影山（2009：38－39）では（21a）のような合成複合形容詞の形態構造と意味構造を次のように表示している。

（22）a. 形態構造



b. 意味構造

λx（〔x’s N〕BE AT-〔A〕）

すなわち、「悪趣味だ」＝「趣味が悪い」

そして、影山（2009：39）は、（22a）で提案した形態構造では、「＋A」と「＋N」の素性が直接に 2 つの依存部から提供され、この構造には品詞転換（転成）が関与していないと結論づけている。しかし、影山（2009）の分析にも全然問題がないわけではない。例えば、（18b）の漢語派生語に属する否定辞の「不・無・非」のすべてを形容詞（〔＋A〕）と分析してよいものなのか、そしてこれら修飾

型形容名詞が転成ではなく素性合成によるものであるとすれば、前述の主述型形容名詞に対しても同じような分析がなされてもよいのではないかなどの疑問が残る。この問題については、本稿ではこれ以上ふれないことにする。

四、和語否定辞の「～ない」と漢語否定接頭辞の「不–・無–・非–」を含む合成形容詞と形容名詞

日本語の語彙層は主に和語・漢語・外来語の 3 つの層からなるが、否定辞に関して、和語語彙では否定を表す「ない」が形容詞に属し、肯定を表す「ある」は動詞に属するという非対称性を呈する。一方、漢語語彙では、否定を表す「不・無・非」のすべてが副詞（あるいは、「無」のように副詞「不」と動詞「有」の合体）[61] に属するのが対照的である。本節ではこれら否定辞の合成形容詞における職能について考察してみたい。

（一）和語否定辞の「～ない」を含む合成形容詞

まず、日本語の否定辞である「ない」の派生形容詞における役割を考察する。上述したように、主述型・修飾型・並列型は日本語の典型的な複合形容詞のタイプであるといえるが、これらに属さないタイプの複合形容詞も見られる。例えば、動詞の連用形（V-（i））と否定を表す形容詞の「ない」から成り立つ否定述語型がその 1 つである。

（23）a.「否めない」（＝「（否む（イナム）＞）否め（る）＋ない」）：イナメ¯ナイ

b.「忍びない」（＝「（忍ぶ（シノブ／シノ¯ブ）＞）忍び＋ない」）：シノビ¯ナイ／シノビナ¯イ

c.「詰まらない」（＝「（詰まる（ツマ¯ル）＞）詰まらない」）：ツマラナイ

[61] 日本語における漢語否定接頭辞の「不-・無-・非-・未-」などの意味・用法については、湯・簡（2010）を参照されたい。

d. 「居た堪れない」[62]（＝「(居た堪る（イタタマル）＞居た堪れ＋ない」）：イタタマレ¯ナイ

e. 「戴けない」（＝「(戴く（イタダク）＞）戴け＋ない」）：イタダケナイ

f. 「堪らない」（＝「堪る（タマル）＞）堪らない」）：タマラナイ

g. 「相容れない」（＝「相（アイ）・容れる（イレル）＞容れ＋ない）：アイ（・）イレナイ。[63]

動詞語幹と否定の形容詞語幹は、この他に「当らない・争えない・有り得ない・有りもしない・いけ好かない・いけない・至らない・押しも押されもしない・覚束ない・思い掛けない・及ばない・限らない・隠れも無い・数え切れない・{叶（かな）／適（かな）}わない・構わない・{利（き）／聞（き）}かない・食い足りない・食えない・下（くだ）らない・解（げ）せない・堪（こた）えられない・{締（し）／緊（し）}まらない・冴（さ）えない・好かない・過ぎない・{優（すぐ）／勝（すぐ）}れない・済まない・似（そ）ぐわない・堪えない・違いない・成らない・似合わない・煮え切れない・憎めない・始らない・似ても似つかない・振るわない・間違いない・澱（よど）みない・分からない」など数多くあるが、これらは打ち消しの動詞が形容詞に転化したものと見られ、その中には形容詞の中に取り立て詞の「も」や動詞の重複を含むもの（例えば、「有りもしない・押しも押されない・似ても似つかない」）も入っている。

また、「ない」は非存在や打ち消しを表す述語としても使われるので、主述型（{N／V-(i)}|| ない）の形式を取った「味気ない・呆気（あっけ）ない・危（あぶ）な気（げ）（の）ない・えげつない・臆面もない・惜（お）し気（げ）もない・惜しみも無い・大人気（おとなげ）無い・思いも寄らない・及びもつかない・限

[62] 「居た堪れない」には、「居た堪らない」（イタタマラ¯ナイ）という言い方もある。

[63] 「相容れない」には「相容れる」という動詞は存在せず、「相」という副詞表現と「容れない」という打ち消しの動詞が複合して形成されたもので、「相」と「容れない」の間には短い停頓（pause；「(・)」の記号で表現されている）が起こり、アクセント核も「アイ」と「イレナイ」と2箇所に起こっている。

り無い・隠れも無い・数限り無い・頑是無い・気{が／の}置けない・気{が／の}利かない・気が知れない・気の無い・極りない・心無い・心許無い・此の上（も）無い・然り気ない・仕方（が）無い・しどけない・仕様がない・所在ない・如才ない・素気ない・是非ない・造作ない・底知れない・だらしない・頼りない・他愛無い・力無い・突拍子も無い・途轍もない・情け無い・何気ない・二道も三道も行かない・鮴膠も無い・抜き差しなら無い・退っ引き成らない・湍ない・果てしない・引きも切れない・引っ込みが付かない・一溜りも無い・不甲斐ない・間が持てない・紛れも無い・間も無い・虫が好かない・無理も無い・目が無い・滅相も無い・申し訳ない・勿体無い・遣る瀬無い・余儀ない・埒も無い・訳無い・理無い」なども数多く見られる[64]。このように、複合語全体の音声形式には似通ったところがあるが、内部構造とそれに対応している意味内容には異なるものがあるので[65]、注意しなければならない。しかし、これらの複合形容詞に共通する特徴はすべてが右側主要部の内心構造に属し、「無い」を主要部とするということである。

（二）漢語否定接頭辞の「不・無・非」を含む合成形容詞と形容名詞

和語の否定辞「ない」が形容詞として動詞の語幹の後ろに主要部として現れて合成形容詞を形成するのに対し、漢語の否定辞「不・無・非」は副詞として動詞語幹・形容詞語幹や名詞語幹[66]の前に修飾語や付加詞として現れて合成形容名詞を形成する。また、「ない」を含む合成形容詞が右側主要部の内心構造に属するのに対し、「不・無・非」を含む合成形容名詞は 主要部を持たない（あるいは依存部と依存部からなる両側依存部の）外心構造に属する。まず、漢語否

[64] この他に少数ながら、形容詞（例えば、「忙しない」）、副詞（例えば、「ただならない」）やテ形動詞（例えば、「無くては成らない、成ってない・願ってもない」）などを前項語幹にするものもある。

[65] このためか、「～ない」を含む複合語のアクセント型に関する通則を発見するのは難しいようである。

[66] 漢語の否定辞が副詞なのに、名詞語幹の前に現れてこれを修飾できるのは、「不・無・非」などの否定辞が実際に漢語動詞の「有」（和語動詞の「ある」に相当する）や「是」（和語動詞の「だ」に相当する）などを内包して合体しているからである。

定接頭辞を含む語例を下に挙げる。

（24）a.「不-」:「不思議（な）・不機嫌（な）・不可能（な）・不可避（な）・不可解（な）・不可欠（な）・不合理（な）・不自然（な）・不始末（な）・不消化（な）・不注意（な）・不調和（な）・不都合（な）・不得意（な）・不愉快（な）・不用意（な）・不利益（な）・不安定（な）・不衛生（な）・不穏当（な）」など[67]。

b.「無-」:「無慈悲（な）・無遠慮（な）・無気味（な）・無作法（な）・無軌道（な）・無自覚（な）・無造作（な）・無批判（な）・無理解（な）・無愛想（な）・無風流（な）・無神経（な）・無責任（な）・無節操（な）・無頓着（な）・無分別（な）」など[68]。

c.「非-」:「非常識（な）・非人情（な）」など[69]。

これら否定接頭辞のうち、「不-」に後続する語幹には名詞が多いが、「思議・可能・不避・可欠・自然[70]・愉快・穏当」などは名詞というよりも動詞や形容詞であり、「思議（する）・消化（する）・調和（する）・都合（する）・用意（する）・安定（する）」も動名詞（VN）としての用法がある。否定接頭辞の「無-」に後続する「遠慮（する）・自覚（する）・批判（する）・理解（する）・頓着（する）」などにも動名詞の用法があるので、否定接頭辞の「不・無・非」を果して影山（2009）のように形容詞と解釈するのか、それとも漢語元来の用法に従って副詞と解釈するのか、という微妙な問題もある。こ

---

[67] 漢語否定辞の「不-」が和語語幹を取る語例も、「不得手（な）・不束（ふつつか）（な）・不届（とどき）（な）・不釣合（つりあい）（な）・不似合（にあい）（な）」のように存在する。

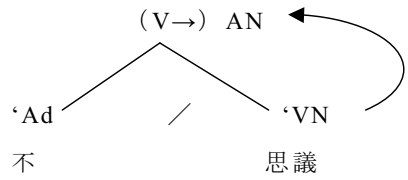
[68] 少数ながら、「無躾（ぶしつけ）（な）・不躾（ぶしつけ）（な）」などのように和語語幹を取る語例が存在する。

[69] 「非-」を接頭辞に取る語例の数は「不-」や「無-」に比べてはるかに少なく、「非力（な／の）・非凡（な／の）」などは、「ナ形」と「ノ形」の両方を取るようである。また、漢語の否定接頭辞はこのほかに「未-」があるが、「未来（の）・未知（の）・未明（の）・未開発（の）」のように、ほとんどが「ノ形」を取る。

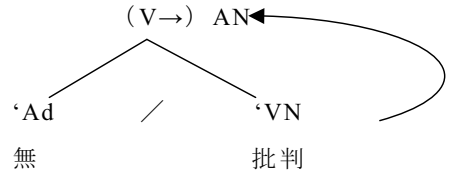
[70] ここでは、「自然（界）・天然（界）」という名詞の意味ではなく、「自然である様子」という形容詞の意味であることに注意されたい。

のため、これらの語例が影山（2009）の主張するように品詞転換／転成ではなく、主要部を持たない両側依存部の範疇素性からの滲透による外心構造の合成形容名詞であるという主張も再考の余地があるのではなかろうか[71]。また、後項語幹が動詞や名詞の場合、複合語全体の素性〔＋A, ＋N〕はどのように合成されるのであろうか。本稿では品詞転換（転成）の視点から、(24) の語例について次のような樹形図の内部構造を提示する。

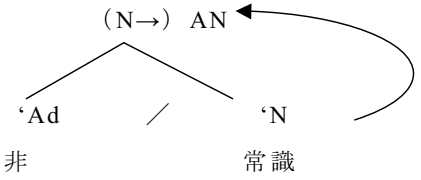
（25）a. 不思議な



b. 無批判な



c. 非常識な



五、結び

以上、日本語の形容詞と形容名詞の複合語について、内部構造と外部機能の関連という視点から、その形態・意味・機能について述べてきた。結論としては、複合形容詞も複合形容名詞も、主述型や

[71] 実際に（24）の語例は、否定接頭辞あるいは副詞語幹が後項語幹を修飾する右側主要部の内心構造であり、影山（2009）の論文タイトルも「外心構造における意味と形態のミスマッチ---『太っ腹』のタイプの形容名詞」もこのような観点を示唆しているのではなかろうか。

修飾型の内部構造に属する語例が多く、並列型の内部構造に属する語例はごく少数である（形容詞の場合）か、皆無の状態（形容名詞の場合）であることを指摘し、そのほとんど全部が右側主要部の内心構造に分析できることを樹形図を添えて説明した。

日本語の複合形容詞や形容名詞のほとんどが右側主要部の内心構造に属することは、日本語が言語類型（language typology）的に主要部末端／右側言語（head-final／last）に属するという言語事実に符合し、この類型特徴が文・節・句・語に拘らず、共有されているということは、日本語の主要部末端という主要部パラメータ（head parameter）がすべての統語構造に適用されるという自然で合理的な帰結で説明ができる。また、例外的に一部の語例に見られる外心構造の現象については、右側主要部の内心構造からの品詞転換（転成）の結果であるというように分析し、影山（2009）がこれらの語例を両側依存部の外心構造であるという分析と対照・比較した。

さらに、影山（2009）が言うように修飾型の「太っ腹（な）」のような語例が両側依存部の外心構造であるとすれば、主述型の「身軽（な）」のような語例も同じような分析されるべきでないかという問題を提起し、かつ漢語否定辞の「不-・無-・非-」に動詞語幹や形容詞語幹が後接した場合には、合成形容名詞全体の〔＋A, ＋N〕素性はいかにして合成されるのかという問題にも解答を与えなければならないことを指摘し、今後の研究課題として解明していく必要のあることを提案する。

参考文献

王淑琴（2006）「日本語における否定接頭辞「不ー」「無ー」「非ー」の語形成ー語基に課される意味的な制約」『東呉外語学報 23』PP.127-147、東呉大学外国語文学院。

影山太郎（2009）「外心構造における意味と形態のミスマッチ---『太っ腹』タイプの形容名詞」、由本陽子・岸本秀樹（編）『語彙の意味と文法』PP.25-45、くろしお出版。

Kishimoto, Hideki（2009）‘On the Formation of Lexicalized Negative Adjectives’ ,

由本陽子・岸本秀樹（編）『語彙の意味と文法』PP.47-64、くろしお出版。

金田一春彦（監修）・秋本一枝（編）（1981）『明解日本語アクセント辞典 第二版』、三省堂。

湯廷池（2000）「日本語文法の再検討 :「形容動詞」か「形容名詞」か」『新世紀之日語教學研究國際研討會論文集』PP.125-136、東呉大学日本語文学科。

湯廷池（2008）「否定接頭辞「不-」の意味機能と共起制限」『東呉外語学報 27』PP.137-154、東呉大学外国語文学院。

湯廷池・簡嘉菁（共著）（2010）「日本語否定接頭辞「不-・無-・非-・未-」の意味機能と共起制限」、『東吳日語教育學報 34』PP.33-58、東呉大学日本語文学科。

新村出（編）（1991）『広辞苑 第 4 版』、岩波書店。

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』、東京堂出版。